



## いのちの初夜

北条民雄著 角川書店 1955 (角川文庫)

文学部教授 三浦 弘

北条民雄という作家の全集はたったの2冊で完結しています。それは作家として生きた期間が19歳から23歳までの4年足らずだったからです。学生の皆さんとほぼ同じ年齢ですね。しかし、生き方が違います。人間としては生きていないのです。「いのち」だけが生きていたのです。自殺を避けるためだけに書いていたのです。

1930(昭和5)年、彼が16歳のとき、当時は社会的差別を受けるほどの不治の病であった「癩」(ハンセン病)が発症しました。父親は世間の偏見から妹弟たちを守るために、民雄の戸籍を抹消しました。作家志望の青年は19歳で東村山の全生病院(現在の多磨全生園)に入院しました。そこは人間としてはすでに亡びてしまった世界でした。

彼は入院当初の一週間に受けた、強烈で絶望的な印象を初日の一夜の物語に凝縮し、「最初の一夜」という作品に仕上げました。そして川端康成に郵送すると絶賛を受け、「いのちの初夜」と改題して、『文学界』に掲載されました。

彼のハンセン病はほとんど進行していなかったにもかかわらず、執筆の無理が祟って腸結核で他界してしまいました。技巧のない、命の叫びを聞いてください。

## シリコンバレーから将棋を観る： 羽生善治と現代

梅田望夫著 中央公論新社 2009

文学部准教授 久木留 毅

著者の梅田望夫は、アメリカ・シリコンバレーで10年以上も情報産業コンサルタントをする一方、熱狂的な将棋ファンでもある。今回紹介する本は、著者が将棋の永世名人“羽生善治”との対談と聖戦、竜王戦のウェブ観戦記を含む現代将棋についての文章、対談をまとめたものである。「将棋」と「インターネット社会」について、深く掘り下げた一冊であり、将棋について興味がなくても十分に堪能できる内容である。将棋という日本の伝統芸をリードする羽生永世名人達の対局に潜む思考から、現代のインターネット社会の未来を分析し進むべき方向性に言及している点に注目したい。

また、ビジョナリー(visionary)という言葉が紹介されており、「未来をイメージし、そこに向かって一歩を踏み出している人たち」「思考するだけでなく、自らが思い描く未来のビジョンを実現するために行動し、そしてその過程で、未来の本質を示唆する何かを表現する人たち」と解説されている。

将来について様々な思考を巡らす大学生に、勧めたい一冊と言えるであろう。

